

特集：新型車（CX-5）

18

CX-5 のデザイン Design of CX-5

中山 雅*1

Masashi Nakayama

要約

CX-5 はマツダの「SKYACTIV TECHNOLOGY」と新デザインテーマ「魂動（こどう）」を採用した初めての市販モデルである。これまでにない技術とデザインテーマを融合し、マツダは CX-5 を、まさに獲物に飛びかかろうとするチーターを彷彿とさせる、生命力と躍動感を研ぎ澄ませたデザインに造り込んだ。エクステリアでは、造形がクルマとしての性能・機能と高次元でバランスした、スポーティかつ堂々としたスタイルを追求した。インテリアでは、ひと目で「運転してみたい」と感じ、乗って納得する空間の創出を目標に、力強さと質感の高さを感じられるドライバオリエンテッドなデザインを表現した。

Summary

The CX-5 is the first vehicle available in the market that has adopted Mazda's next generation "SKYACTIV TECHNOLOGY" and its new design theme "KODO". Through the process of bringing the entirely-new "technology and design theme" into reality, we came up with the CX-5 having a sophisticated styling with vital energy and dynamics feel. This reminds us of a cheetah that is about to pounce on its prey. With regard to the exterior, we pursued a sporty and dignified styling that would allow users to sense a perfect balance between the form and the performance and functionality as a car. Meanwhile, for the interior, we attempted to create a space that would make users feel like driving the car just by looking at it and convince them once they get in the car. Through these efforts, we were able to achieve a driver-oriented design that offers dynamism and high quality feel.

1. はじめに

コンパクトクロスオーバー SUV セグメントは市場規模がグローバルに拡大傾向にあり、この先も有望なセグメントである。CX-5 は、その真ん中を狙って投入され、デミオ・アクセラ・アテンザに次ぐ新たな基軸車種として、マツダのブランド力向上に貢献する使命を持って開発された。

そのため、開発にあたっては世界各国の市場特性を理解し、それぞれのコンパクト SUV クラスへジャストミートさせることを念頭に入れながら、マツダらしいデザインを実現することに注力した。

一方その開発自体は、「SKYACTIV TECHNOLOGY」を余すことなく具現化するべくほぼ全ての部品を新設計し、

同時に新デザインテーマ「魂動」を表現するという、大きなチャレンジを伴うものとなった。そのチャレンジが独自のデザインとして結実するよう取り組んできた開発過程も絡め、CX-5 のデザインの魅力について紹介する。

2. デザインコンセプト

2.1 新時代デザインテーマの構築

2010 年夏、マツダは新しいデザインテーマ「魂動」を発表した (Fig.1)。これは「生き物が『動き』の中で見せる一瞬の美しさや力強さ」から受ける強いインスピレーションを自動車のデザインに昇華させようというものである。

これを端的に表現したコンセプトカーとして「靱（シナリ）」を同時に発表し、世界的に高い評価で受け入れられ

*1 デザイン本部
Design Div.

た。更に第2弾として、2011年、「勢（ミナギ）」をジュネーブショーで発表し、魂動のさらなる可能性を示すモデルとして世界に紹介した（Fig.2）。

実際には「勢」は、CX-5のデザインテーマが決定した後で、同じテーマを使いながらショー用の化粧を施して製作されたモデルである。つまりCX-5のデザイン開発は、実は「魂動」の創出と同時に進められていた。マツダの新しいデザインテーマを創りながら、同時にそれをCX-5のデザインとして結実させる。これが「魂動」のトップバッターであるこの車のデザインチームに課せられた役割だった。



Fig.1 KODO: SOUL of MOTION



Fig.2 SHINARI & MINAGI

2.2 マツダらしさとSUVらしさの両立

一般的な傾向では、SUVらしい強さや逞しさを表現すると鈍重なデザインになりやすく、逆にスポーティで軽快なデザインにすると力強さが失われがちである。しかしカスタマーの多くがSUVの力強いイメージをポジティブに捉え、それを好んで乗っていることがマツダの調査で分かっていた。

そこでこれらを両立し、力強さとスポーティさを併せ持つ独自のポジショニングターゲットとして設定した（Fig.3）。

以下にその具体的な手法について解説する。

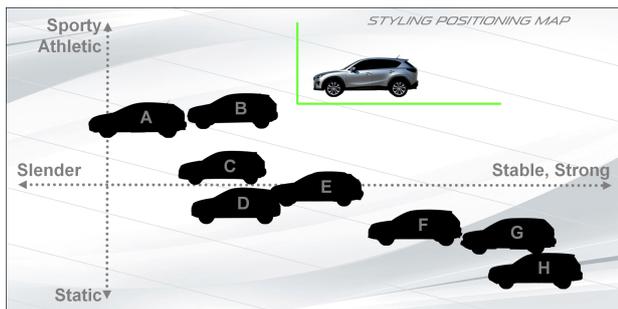


Fig.3 Styling Positioning Map

3. エクステリアデザイン

3.1 動きを予感させる独特のプロポーション

CX-5はグローバル商品である。したがって世界のどの国でも強い存在感を表現しなければならず、たとえ北米の大地のスケールで見ても認知できる骨格を持つ必要がある。

まずSUVらしさを表現するために、車の「高さ」と「踏ん張り感」の重要性に着目し、加えてしっかりとノーズの存在感を出すことで、ミニバンやハッチバック車と一線を画すSUVらしい基本のシルエットを規定した（Fig.4）。

その上で、陸上短距離選手のスタート前の姿勢のように車全体の姿勢を前傾させ、かつ、Aピラーを後方に引いてキャビンを後退させることで、より後ろ足に荷重が掛かった、今にも走り出しそうな動きの予感を表現した（Fig.5）。

これらにより、アスレチックでありながら堂々たるSUVらしいプロポーションができただけでなく、後ろに引いたAピラーが良好な運転視界にも寄与するため、運転する喜びとスポーティなデザインとが高次元でバランスした基本骨格になった。

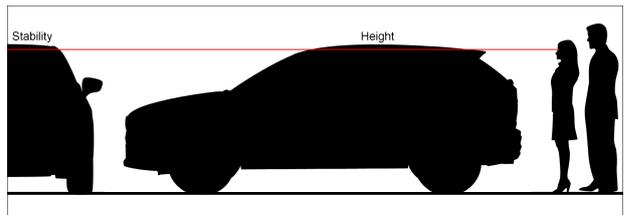


Fig.4 SUV silhouette

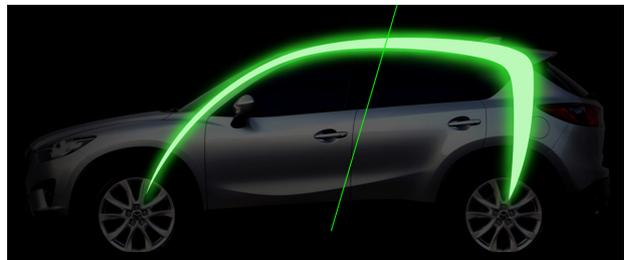


Fig.5 Side View Proportion

3.2 新しいファミリーフェイス

一目でマツダと分かる顔を目指し、コンセプトカー「翹」で発表して「シグネチャーウイング」と名付けた羽ばたく翼の紋章をグリル外周にあしらった、新しいファミリーフェイスを持った最初の量産車となる（Fig.6）。

やや下を向かせた立体的なフロントグリルは前傾した車の姿勢を強調し、反対に上を睨み上げるようなランプの表情は獲物を狙うチーターをイメージしてデザインした。それらをつなぐシグネチャーウイングはクロームメッキ処理され、スポーティさと質感の高さを表現している。

フェイス下側の力強い造形はSUVらしさと車格感を表現し、全体として精悍でハンサムな顔立ちを構成、CDカーから乗り換えても納得できる風格に仕上がった（Fig.7）。



Fig.6 Family Face with Signature-Wing



Fig.7 Front View

3.3 艶があって凛とした、魂動のボデーランゲージ

(1) 「動きの予感」に呼応するキャラクタ

ボデー全体のウェッジシェイプに呼応するようボデーサイドのキャラクタラインやホイールアーチの傾きを合わせ、全体の印象をダイナミックに演出した。クーペのように倒れたバックウィンドウは、SUV にありがちな鈍重なイメージを払拭し、特にクォータービューでのシルエットに軽快感を与えている。その際、リヤウインドウ下端位置を後方かつ上方に持ち上げることで十分な荷室を確保し、同時に車体が前傾したイメージも強調した。

ヘッドランプ内側からつながるボンネット上の折れラインは、フェンダを斜めに横断しながらドアへと消えて行き、RX-8 に始まるマツダ独特の「隆起したフェンダ」の新たな表現とした。そのラインの曲率にも変化を持たせ、ボデー下部の跳ね上がるラインとともに書道の「ため」と「はらい」のようなリズムとスピード感を表現した(Fig.8)。



Fig.8 Design Theme

(2) アスリートのように引き締まったリヤビュー
リヤフェンダの張り出しは強い踏ん張り感を表現した。加えて、鍛え上げたアスリートのヒップを思わせるリフトゲート周りの面の張りとのコンビネーションによって、お尻が重い一般的な SUV とは違うセクシーな後姿を作り出している。

フェンダ自体も SUV に多いオーバーフェンダ風とせず、強い抑揚のあるボデー断面と連続させることで、艶やかで魅力的な面の表情を狙った。それらによって、美しくも逞しいたたずまいを実現している (Fig.9)。



Fig.9 Rear View

3.4 世界最高レベルの空力特性と魅力あるデザイン

走る歓びを高い環境安全性能と両立するマツダの「サステイナブル “Zoom-Zoom”」を表現するには、スポーティなデザインと高い空力特性とが並び立つ必要があると考えた。

ボデー後方は、緩やかに下がるカーブを描くルーフ形状と、サイレンサ部分が上方に跳ね上がる形状を持ったフロアとの組み合わせによって、全体を飛行機の翼断面の一部のようなカタチに構成している。これはルーフから吹き降ろす風とフロアから吹き上げる風とをスムーズに整流させる効果があるが、引き締まったリヤビューを表現することにも役立っている。また標準装備としたルーフスポイラの横に小さなフィンをつけることで、整流効果を更に高めながら、アグレッシブな外観を作り出した。

フロントのコーナ部の造形は、気流を剥離させるために単にエッジを立てるだけでなく、SUV らしい強さと踏ん張り感の表現としても造形した。

これら全体の工夫により、Cd 値はクラストップとなる 0.33 を実現した。しかしこれは構造の見直しだけでなく、コストもかける必要があった。スポーティなデザインと高い空力特性の実現という、妥協なき目標を開発チーム全体で共有していたことにより達成できたものである (Fig.10)。



Fig.10 Aerodynamics

4. インテリアデザイン

4.1 乗る人をワクワクさせるコックピット

インテリアデザインは、ドアを開けた瞬間「乗ってみたくなる」、また、乗れば「走る歓び」を体感できるコックピットを目指した (Fig.11)。

運転席周りを車の前後方向、それ以外の部分を横方向 (水平基調) とする造形のコントラストを付け、運転席を特別な空間として演出した。小ぶりのメータクラスターの彫りの深い造形は走りのワクワク感を誘い、それと対照的に水平基調のインパネ本体はロール等「車の挙動」を自然に読み取れるようデザインした (Fig.12)。

立体文字盤とクロームリングでスポーティかつ精緻感あるメータでドライブ正面を演出し、コンソールとドアトリムに配した金属質感のバーで足元のタイト感を強調。全体としてドライバの気持ちを高揚させるコックピットの雰囲気づくりを行っている (Fig.13)。



Fig.11 Cockpit



Fig.12 Design Theme



Fig.13 Gauge / Door

4.2 欧州プレミアムと並ぶ高いクラフトマンシップ

造り込みに関してもグローバルに通用する高いクラフトマンシップを目指し、丹念なデザイン処理を施した。

インパネとドアトリムの上部はメータフード含めて全てソフト素材で覆い (Fig.14), SWパネル等の表面に縦縞ストライプ処理を加えてモダンなテイストを与えた。また、体が触れるアームレストは柔らかい素材で覆い、触感の良さも表現している。

インパネ中央部には、高い質感を表現する加飾パネルを装着。表面処理はマツダが RX-8 で世界に先駆けて採用したピアノブラック塗装とし、形状を含めてロードスターとの関連性も感じさせる、マツダの伝統への想いを込めている。

金属質感を持った光沢パーツは、スイッチなどに瞬時に目が行くよう考えた視線誘導用と、骨組みのような強さを視覚的に期待したい剛性感表現に集約し、それぞれに妥協なく配している。剛性感表現に使用した部位は、金属を削り出したような本物感溢れる形状と断面を再現した。そのため、表面処理は削り出しのアルミを丹念に磨いたような鈍い光を放つ「サテクローム」と呼ぶ新しい手法のメッキとしている。これらにより、大人っぽく質感の高いインテリアの雰囲気を醸し出している (Fig.15)。



Fig.14 Soft Material



Fig.15 Satin Chrome

5. カラーデザイン

5.1 SKYACTIV TECHNOLOGY と魂動を表現したボデーカラー

ボデーカラーに関しては、車の特徴やマツダのイメージを牽引する戦略カラーと、カスタマーの好みや各市場のニーズを反映したスタンダードカラーとに大別してラインナップを揃えた。

「SKYACTIV TECHNOLOGY」の象徴としてアクセラから導入した Sky Blue MC は CX-5 でも継承し、新たに魂動デザインの表現（力強さや色気）をより際立たせるカラーとして Zeal Red を新色として開発、この 2 色がイメージを牽引する役割を担う。他の色はグローバルなカスタマーニーズに適確に答えることを目的とし、マツダの既存ラインナップの中で最も時代性に合う高品位なカラーを選びすぎり、全体のバリエーションに幅を持たせている (Fig.16)。



Fig.16 Body Color

5.2 インテリアコーディネーションは大人の知性と艶

(1) カラーコーディネーション

黒で統一した内装は、サテッククロームの加飾とのコントラストによりスポーティさをピュアに表現した。助手席前のピアノブラック加飾は、基調となる Black の空間に艶やかさを加えることに寄与させた。

(2) レザーシート

レザーシート素材にはパーフォレーション（穴開け）加工を施した本革を採用した。パーフォレーションは吸音性能が高く、室内の静粛性向上にも貢献。そのため、穴の大きさやピッチまで吟味しており、最上級グレードに相応しい質感と機能性を持った仕上がりとなっている。

ステッチに関しても、ダブルステッチ部はツインカラーステッチ（隣り合う糸の色を変える）という新しい手法を用い、アクセントカラーの主張を適度にコントロールすることで、センスの良さを醸し出している。

(3) ファブリックシート

緻密で質感の高い織物とテクニカルなエンボス加工を融合させた、革新的発想のシート素材を採用した。

布表面の凹凸はダイナミックな模様を描き、「マット&グロス」と呼ぶ艶のコントラストが SUVらしい力強さとスポーティさを引き出している。また、シート本体の立体感と相まって、存在感と造り込みの良さが表現されている

(Fig.17)。



Fig.17 Seat Material

6. おわりに

CX-5 は「動いて」カッコよく見え、「使って」喜びを感じるデザインになったと思っている。

SUV が欲しいと思う人の期待を裏切らない力強さを持ちながらスポーティなエクステリアは、止まっても動き出しそうに見え、オーナーの心を昂ぶらせるだろう。

また、無駄のない機能美を追求し、本物感にこだわりながら丹念に造り込んだインテリアは、使い込むほどに深い満足感を味わっていただけるものと思う。

「SKYACTIV TECHNOLOGY」と「魂動」を具現化した CX-5 は、発表後、当初の期待以上の高い評価をいただいております。マツダの考え方に共感してもらえる人々が数多く増えていることを実感しています。

CX-5 とこれからの新型車を通して、サステイナブルな走る喜びを提供するマツダの「お客様への約束」が、これからもより多くの方に届くことを心から願っている。

■ 著 者 ■



中山 雅